小学校英語における
異文化理解の視点を取り入れた教材の開発

学籍番号　199323
氏　名　首藤紗果
主指導教員　加賀田哲也

1. 研究の背景

近年日本では、外国にルーツのある子どもが増加しており、学校や地域社会で共に過ごす人々が多様化している。子どもたちがすぐに多様性を受け入れ理解することは難しいが、身近なところから多様な人がいるということを知り、認め合おうと努力をすることが大切だと考える。小学校英語では、実際に英語を使うことを通して多様な文化に触れ、多様なものの見方や考え方を習得することで、異文化に対する理解を深めることが期待されている。

既存の教科書等に異文化に関する題材は含まれているが、表面的な知識理解に留まってしまう可能性が高い。そこで、今後は小学校学習指導要領が目標とする異文化理解をより深められるような題材や授業を研究していく必要があると考えた。本研究では、小学校英語において児童の異文化に対する理解をより深められるような授業のあり方を開発することを目的とし、児童が多様な文化に触れ、多様なものの見方や考え方を得る機会づくりに努める。

研究方法としては、まず先行研究や学習指導要領等を参考に、異文化の取り扱いや、異文化理解の視点を取り入れる際留意すべき点を整理した上で、それらを踏まえた教材を開発し、諸単元に組み込み、授業実践をおこなった。実践後は、授業内の振り返りの記述等、学習者の反応を分析し、開発した教材の有効性や改善すべき点を成果及び課題としてまとめた。研究対象は、実習校の第4学年及び第6学年の児童である。

2. 小学校英語における異文化の取り扱い

本章では、小学校英語における異文化理解の取り扱いについて、小学校学習指導要領や先行研究、文部科学省検定済教科書から内容をまとめ、整理した。小学校学習指導要領の外国語活動及び外国語科においては、目標や内容の取扱い等で小学校英語の中で積極的に異文化理解の内容を取り入れていくことや、その際に指導者が留意すべき点についての記述が見られる。次に、先行研究をもとにし、異文化受容のプロセスについて理解を深めた上で、異文化理解の捉え方を探った。学習指導要領の目標からも見られる通り、授業の中で異文化理解を進めていくことは必要不可欠であるが、異文化を受容したり理解したりすることは決して簡単なことではない。指導者の役割としては、授業の中で異文化を取り扱う際、ステレオタイプを与えてしまうことを避け、特定の国または地域や内容に偏らないといった、様々な工夫及び留意が必要である。そして、授業実践に繋がる内容として、2020年度から使用が開始された文部科学省検定済教科書を分析し、教科書に見られる異文化理解について調査及び整理した。

3. 小学校英語における異文化理解の視点を取り入れた教材の開発と実践

本章では、実際におこなった教材開発とそれらを用いた授業実践について、概要、具体、成果及び課題をまとめた。

基本学校実習では、第4学年の外国語活動において、『Let's Try! 2』Unit 8「Alphabet」の単元で実践をおこない、授業導入部及び展開部に異文化理解の視点を取り入れた。日本と世界のクリスマスについて取り上げ、文化の共通点や相違点が発見できるよう努め、ロシアやメキシコを例とした世界のクリスマスについて紹介することで、児童が異文化に興味を持つきっかけをつくることを目指した。学習者の反応を分析した結果、クリスマスの多様性への気づきや、文化的差異の発見を出発点とし、その他の行事についても知的探求心を持って広げようとしている姿が見られた。一方で、相違点ばかりに目が行ってしまい、文化の共通点に着目しにくい教材であったことや、カリキュラム・マネジメントの視点の弱さ等の課題も明らかとなった。

発展課題実習では、第6学年の外国語科において、『NEW HORIZON Elementary English Course 6』の3単元の中で異文化理解の視点を取り入れた教材を用いた実践をおこなった。具体的な教材としては「国旗の色とその意味を考えよう」「“sushi”から見る世界と日本のつながり」「世界の食事マナークイズ」「世界の朝ごはんをのぞいてみよう」等である。学習者の反応からは、文化間の相違点及び共通点への気づきや、異文化に対するイメージや価値の変容等、様々な姿が捉えられた。課題としては、国旗の色に込められた思いや政治、社会、歴史的背景にまで迫ることはできなかったことや、文化の差異を排他的に捉えてしまった児童に対し、どのような指導をすべきかについて検討の余地があること、児童が授業に能動的に参加するための更なる活動の工夫を要すること等が挙げられる。

4. 異文化理解の視点を取り入れた教材開発の可能性

本章では、教育実践研究を振り返り、今後の課題と展望を明らかにした。

異文化理解は、外国語活動及び外国語科のみに限らず、様々な教科や教育課程、強いては生涯にわたって学ぶべきことであると考える。本研究では小学校英語の面から異文化理解の一助となる教材や授業について考えたが、子どもたちが自分とは異なる未知の文化について“英語を通して”学んでいくところに価値と難しさを感じた。児童の外国語の語彙や表現が限定的である初等教育段階で異文化理解を扱う際は、指導者の様々な工夫が必要不可欠である。指導者ができる工夫としては、他教科との連携、指導者自身の異文化体験の共有、ALT や留学生等人的資源の活用等が挙げられる。人的資源の活用については、社会に開かれた教育課程が目指される中で、カリキュラム・マネジメントの視点も重要であろう。これらについては、今後も考察を深めていくことが必要である。

異文化の取り扱いに関しては、目に見えやすい文化が扱われることが多く、異文化理解の授業が文化紹介に留まってしまうケースも少なくない。しかし、異文化理解のために大切なのは、目に見える文化を理解するだけでなく、文化の背景にある、目に見えないものにも迫ることである。小学校英語の中で異文化を扱う際は、単なる知識の提供で終わるのでなく、教師が学習の中で児童に思考させる場面を設けることや、目に見える文化だけでなくその背景にある目に見えない文化も意識的に扱っていくことが非常に重要であり、乗り越えていくべき課題の一つである。